

編集後記

今年もまた、年中行事のように、この原稿を書く時季になつてきた。今度も今迄と同じように、とくに奈文研の所員の人達の全面的なご協力によつて、無事刊行の運びとなつた。ご多忙のなかを原稿をご執筆くださつた方々にあわせて、心から感謝を申し上げたい。

これまでの七号のほとんどは、十二月始めの総会・研究集会の当日の午前にできあがつてゐるのが実状である。始めのころは随分ひやひやしたものであるが、このごろはそれにも慣れてきて、きっと間に合うと確信できるようになつてきた。それは今迄の経験と、印刷所への信頼からくるようと思われる。いわば、これらの関係者の信頼関係がこのような安心を生みだしてくれるのである。とくに積文については、出来るかぎり正確を期そうと、いろいろな注文をつけて印刷屋泣かせであるが、それにもかかわらずよく我々の意向を聞き入れてもらつていて。改めて御礼をのべておきたい。

それにしても、このようなパターンを生みだされたのは、実は狩野委員である。今でも忘れられないのは創刊号の編集の時のことである。何しろはじめての経験であり、今ではお馴染みのこの表紙や体裁も整わないまま、総会の日がまぢかにせまつて、幹事の大部分、勿論わたくしも含めて、なれば刊行を諦めようとしたとき、断固と

して刊行にむけて頑張るべきだと優しくいわれたのが、狩野氏であったのである。これは先見の明というべきで、この決断があつたればこそ、今日の『木簡研究』があるのである。そうして、今年もまた、この先例をうけて第八号は誕生しようとしている。

ところで、最近も委員会で話題になつたのは、この様に会誌に紹介した後の木簡の保存状況である。ある委員の話では実物を見ても既に木簡は黒っぽくなつてしたり、あるいは全面に黒い斑点があつたりして全く読めなくなつていて。たしかに、木簡が新たに発見されることは、われわれには朗報ではあるが、保存の方法を一度誤ると、取り返しのきかない破壊に繋るのである。さしづめ一つのマニュアルを早急に示す必要があるのでないか、という意見も出ていた。確かにわたくしも、この会の創立当初に、木簡が発見されたとき、第一に処置すべき手順を是非会誌に解説してほしいという意見を聞いたことがある。そのこともあって、何度も保存方法についての論稿をのせたいと考考えたが、なかなか実現せず今日にいたつている。会設立の趣旨にもあるように、本会の会員は木簡についての情報を得て、研究を進めるとともに、木簡の保存などについても、積極的に活動していただきたいとおもう。わたくしたちは、今後も微力ではあれ、その趣旨を生かすよう、はばひろい会員・読者のための会誌にしてゆきたい。

（佐藤宗諱）